

● 第17回東京国際音楽 コンクール〈指揮〉

宮 沢 昭 男

2015年第17回のコンクールは、極めて高い水準で繰り広げられた。結果は次のとおり。

- 1位：ディエゴ・マルティン・エチェバリア（スペイン）
（特別賞・齋藤秀雄賞、アサヒビール賞）
- 2位：太田弦（日本）（聴衆賞、アサヒビール賞）
- 3位：コリーナ・ニーマイヤー（ドイツ）（アサヒビール賞）
- 入選：オンドジェイ・ブラベツ（チェコ）（奨励賞）

1位選出は2000年第12回（下野竜也）以来。それだけに充実ぶりがうかがえる。同コンクールが今回、国際音楽コンクール世界連盟に加盟して初の開催だったことが功を奏したのだろう。粒ぞろいの音楽家が揃った。

第1位のエチェバリアは、地元音楽院で指揮学位を取得後、2006年にバルセロナ国立管弦楽団オーボエ・ソリストに就任。さらに指揮の研鑽を積み、フライブルグ大学管弦楽団首席指揮者を務め、2015年からチューリヒ・トーンハレ管弦楽団に所属する。チェコのブラベツは入選に終わったものの、個人的に本選課題曲までは、その音楽は優勝して当然に聴こえた。1999年プラハ音楽院を卒業以来、チェコ・フィルの首席ホルンを務めて現在に至り、2013年からは同時に、同楽団アシスタント・コンダクターの任もある。オーケストラを知り尽くしているといって過言でない。

3位のニーマイヤーも2010年からフランス・ストラスブール大学オーケストラ芸術監督・指揮者を務め、南西ドイツ放送交響楽団でアシスタント・コンダクターの経験を積んだこともある。入賞者で在学中というのは2位の太田弦のみだった。

応募は40カ国・地域から239名にのぼり、7カ国15名が選考され第1次予選に臨んだ。フランス、ドイツ、ロシア、アメリカ、チェコ、スペイン、そして日本の出場者が並んだ（10月12、13日、両日とも日本フィルハーモニー交響楽団）。

第2次予選には8名が進んだ（同月14、15日、新日本フィルハーモニー交響楽団）。課題は3曲。ここではリハーサルのように進められ、時間内に曲を仕上げる力量が試された。最初に25分で三善晃「管弦楽のための協奏曲」とリスト交響詩「レ・プレリュード」を、休憩後に15分でサン＝サーンス「序奏とロンド・カプリチオーソ」を仕上げる。

ブラベツ（入選）、エチェバリア（1位）はともに身体全体が指揮者然としたスタイルで、何よりも二人はタクトを刻む右腕、表現を示す左腕がそれぞれ高い機能性を示す。前者は言葉掛けこそあまりないものの、後者は言葉も使い自分の解釈を伝えて楽員とのコミュニケーションをはかる。二人はともに腰を折ることもなく、顔はつねに楽団に向けられアイコンタクトが利く。ニーマイヤー（3位）は身長も生かした積極的な曲作りだ。ファイナルに進めなかった中にも、細かく手際よく三善作品の解釈を伝え、テンポやアクセントを指示して力量を示すシーンが見られた。

指揮経験こそ彼らに及ばないものの、優れた音楽性を示して、

楽団員の心をつかんだのが2位の太田だった。三善作品に入る前に譜面のミスを告げるや、団員側から拍手が上がった。自らピアノ譜を作っている中でそれを見つけた、と後日語った。

4名に絞られ、3日後に本選で順位を競った（同月18日、新日本フィル）。審査は、課題曲ブラームス「ハイドンの主題による変奏曲」と、自由曲である。

本番同様に進められた本選は、課題曲のブラームスで個人的にはやはり、これまで舞台を数多く踏んだ経験がその音楽に出ているように思われた。ブラベツはチェコ・フィル首席団員として世界のホールを渡り歩いているだろう。2曲とも暗譜で、オーケストラのまとめ方、ホールの響かせ方にも聞き応えを作った。

それでも最後の自由曲で、コンクールは若さが命だと痛感した。ブラベツがベートーヴェン交響曲第4番の第1、第2楽章を選んだのに対して、残り3名はストラヴィンスキー「火の鳥」（ニーマイヤー）、チャイコフスキー「ロメオとジュリエット」（太田）、同交響曲第5番から第1、第3楽章（エチェバリア）を選び攻勢的に曲を作り上げて勝負に出た。

それを聴きながら、最後まで手堅く纏めることよりも、若い才能に未来の音楽を感じさせ、秘めた可能性を見出すのがコンクールという思いが募った。入賞した4人には21世紀の世界のクラシック音楽界を切り開いていただきたい。

審査委員長：外山雄三。審査委員：マイク・ジョージ（英国）、ペーター・ギュルケ（ドイツ）、ウエルナー・ヒンク（奥）、広上淳一、尾高忠明、ヨルマ・パヌラ（フィンランド）、ユベール・スダーン（オランダ）、高関健。（アルファベット順・敬称略）